

雑誌『少年世界』に描かれた‘貧困’ “Poverty” described in the magazine "Shonen Sekai"

早川 雅子
Masako HAYAKAWA

Keywords : the magazine "Shonen Sekai", Poverty, responsibility

キーワード：雑誌『少年世界』、貧困、自己責任

『少年世界』は、雑誌王国といわれた博文館が1895（明治28）年に創刊、1934（昭和9）年まで刊行した雑誌である。当時発行された子ども向け雑誌のなかで最大の発行部数を誇り、「日本の二十世紀を開いた雑誌の最重要な一つ」¹⁾と評される。読者少年たちは、雑誌を通して、彼らに通底する意識や感情を形成していった。雑誌を媒介として身分や地域などを包摂した広範な層が共有する、この近代ならではの意識をわれわれ意識と呼びたい²⁾。

彼らのわれわれ意識は、東洋の一大強国となった我が大日本帝国を、欧米列強に比肩する一層強大に発展させるべき次世代の担い手＝小国民という自意識や自負心、その役割を果たすために刻苦勉励せねばならないという責任感を特徴とする。国民国家形成の原理であり、近代天皇制を支える臣民意識に連なる思想である³⁾。

読者少年たちは、われわれ意識の発信受信によって相互の存在を確認する空間を構成する。彼らが集う空間は、われわれ意識を共有する読者少年たちの居場所、すなわち、彼らのわれわれ世界である。

ところで、読者少年たちのわれわれ世界には、彼らの力だけでは越えることかなわぬ壁が存在していた。「貧困」という壁である。貧困は、現実には、雑誌『少年世界』の編集方針を、さらに読者少年を二分していった。

創刊当初の『少年世界』は、一絡げに少年を読者対象に想定していた。そのため、創刊後しばらくは高等教育手引き書的な性質をもち、東京を始め都会に校舎を構える高等教育機関の案内、募集要項、入試問題などを掲載した。読者少年の一方は、この種の情報を必要とする高等教育機関進学希望者や在学者であり、進学や遊学が適う家の子弟であった。その一方、『少年世界』は、貧困の意義を説き、苦学する少年を励ます論説や小説なども掲載した。これらの記事を頼みに奮励した読者、すなわち、貧困のため進学の実夢絶たれながらも苦学独学する読者も

存在した。片や都会に出て高等教育機関に学び自分の人生を選び取る可能性を持つ少年、片や郷里に留まり苦学独学して成功を夢見る少年、読者少年たちのわれわれ世界には、貧困という壁で遮られた二種類の少年が存在したのである。

地方に暮らす貧困読者少年は、自らの境遇に関して様々な意見を雑誌に投じた。それら寄書からは、彼らが自らの境遇を飲み込み内面化していく過程、さらに、境遇を同じくする者同士における連帯の誕生を読み取ることができる。この連帯は、読者少年全体のわれわれ世界の内部に形成された、もう一つのわれわれ世界といえよう。

本稿では、『少年世界』読者少年が、当時の日本社会における貧困をどのように見つめていたか、つまり、読者少年全体の貧困観念を確認した上で、貧困読者少年が自らの貧困をどのように捉え、何を拠り所にして諒承、超克していったかを考察する。貧困の把握という観点から、貧困読者少年が形成したもう一つのわれわれ意識やわれわれ世界の意義、それらの特質を明らかにしたい。

中心資料は、『少年時代』第1巻～第4巻までに掲載された論説、小説、寄書を使用する。対象期間は、厳密には1895（明治28）年から1898（明治31）年まで、広くみて1890年代から1900年前後である。

この期間を対象に設定の理由は2点である。1900年前後から「下層社会が異質な外部にではなく、一般社会との関連で位置づけ始められたこと」⁴⁾、及び『少年時代』第5巻における編集方針の全面改定である。新たな編集方針により『少年世界』は、幼年向け御伽話が主体になり、艱難辛苦を奨励する立志伝や論説、読者寄書欄は姿を消した⁵⁾。

『少年世界』は、名著普及会1990年刊行の復刻版を使用する。同誌発行番号は、1895年1月発行が第1巻第1号、翌1896年1月発行が第2巻第1号のように、年間発行冊子分を巻で区分、号数は巻ごとに振られた。これを踏まえ、本稿の引用表記は、原本巻数・号数_原本発行年月_復刻版巻数-頁数とする。例えば、1895年8月発行の第1巻第15号は、1巻15号_1895/8_3-p.1234である。引用文は、仮名遣いと字体は原文のまま、必要に応じて句読点を打った。また、誤字や宛字、確認できない地名は、そのまま表記し傍に(マ)を付した。

なお、以後の論述では、経済的困窮状態にある読者少年を表す言葉として、「貧窮読者少年」「貧窮少年」を用いる。貧困は、経済的欠乏状態のみならず、精神的欠乏状態を意味する。そこで、混乱を避けるため、経済的欠乏のみを意味する表現として「貧窮」を使うことにする。

1. 1900年前後の日本における貧困

考察の前提として、1900年前後の日本社会における貧困の状態を確認しておきたい。

横山源之助『日本の下層社会』は、貧困の状態を具体的な数値を出して記録する。例えば、第一編「東京貧民の状態」では、代表的職業である日稼人足、人力車夫、くずひろい、芸人社会の一日の賃銀、生計費用、家賃などを列挙、貧民の窮迫状態を報告する⁶⁾。しかし、また、

残飯で糊口を凌ぎながらも酒を飲み、隣近所への義理を欠かさず、一様に子沢山だとも報告する⁷⁾。横山のルポルタージュによれば、東京貧民は何とかそれなりに生活していたのである。とすれば、貧困の状態は、客観的な数値とは別の観点からも捉えることができる。

実際、横山は、貧民を定義して、「貧民は経済上の欠乏者たるとともに智識・道徳の欠乏者なり⁸⁾」と論じている。この智識・道徳の欠乏は、客観的な数値とは別の、むしろ主観的な価値ともいえる観点である。この観点に立てば、経済上の欠乏も、数値のみに限らず、智識・道徳の欠乏との連関から検討する必要がある。そこで次に、当時刊行された東京下層社会のルポルタージュを資料に、経済・智識・道徳の欠乏という観点から貧困の状態を捉えてみよう⁹⁾。

先ず、経済上の欠乏である。いずれのルポルタージュにおいても東京貧民の職業は、日稼人足、車引き（人力・荷車）、屑拾い、門付芸人の四種に集約される。これらの職業は、キツイ、キタナイ、そして運送人足や仲仕人足などキケンを特色とする。布川弘（1994）は、賤業という認識を形づくる観念として衛生（不潔）・危険・きつい重労働の三点を挙げるが¹⁰⁾、東京貧民の職業はまさに賤業観念の条件に適合する。門付芸人の卑俗な芸で金品を貰い歩く稼業も、賤業と呼ぶに相応しい。布川が論じるように、四種に集約される職業がいずれも賤業に属することは、賤業は貧民の職業という固定観念の形成に繋がっていく。

貧民の職業は、知識の修得と応用、教養の蓄積を必要とする精神労働の対極にある肉体労働である。資本は自分の身体一つ、熟練を要するにしても、誰にでもできる職業であることは否めない。知識や教養、つまり智識を欠くから、貧民の多くは余儀なくして肉体労働に従事する。その意味で、経済上の欠乏は、直接的には金銭的欠乏という形で現れるが、智識の欠乏を要因とするともいえる。早晩、智識の欠乏を表象する職業＝肉体労働というイメージが定着するだろう。

身過ぎ世過ぎの術としては、もう一つ、物乞いがある。桜田文吾『貧天地饑寒窟探検記』には、「貧民といえども各手職あるものにて、乞食渡世は不具もの、廢疾、老衰、幼弱男女に限るなり」とある¹¹⁾。しかし、桜田が探査した芝新網町木賃宿の住人、主の女を除く9組をみると、手職があるのは36、7歳の飴屋、25、6歳の羅宇の挿げ替え屋の2人に過ぎない。残る7組は、物乞い、あるいは物乞いに等しい。すなわち、教会の救助で露命をつなぐ病者の子連れ中年男、二つばかり孫を抱えた70歳前後の純粹の乞食婆、60歳ばかりの手足が不自由な紙屑拾い、乞食体なる50歳くらいの婆、80歳以上の温和な乞食老爺、察するところ乞食にみえる瘦せ衰えた40歳前後の夫婦、母子で毎夜物乞いする30歳前後の子連れ女である¹²⁾。桜田に限らず貧民窟のルポルタージュには、物乞いが最底辺の貧民を象徴する存在として登場する。資本が身体一つである以上、身体が使えなくなれば、自力で労働の対価を得ることはできない。唯一残された生きる術が、他力に頼る物乞いなのである。

次いで、智識の欠乏である。ルポルタージュで際強調されるのは、智識修得の前提となる教育（教育の機会）の欠乏である。教育の欠乏は、賤業より他に活計がない貧民の再生産に繋がるからである。

横山「日本の社会運動」は、貧民の子の家庭環境や不就学児童の多さを指摘し、貧民として一生涯を終わらせぬためにも家庭教育と学校教育を兼ねた貧民教育の必要性を訴え、貧民学校の創設が急務だと主張する¹³⁾。また、前掲した桜田の探検記、あるいは著者不詳「昨今の貧民窟-芝新網町の探查-」でも、篤志家による私設の「五厘寺子屋（授業料一日五厘に由来）」を取材、貧弱な教育現場を報告し、貧民教育の重要性と緊急性を論じている¹⁴⁾。

最後は、道德の欠乏である。横山は「貧民は思想の欠落者」とも述べ、道德と思想とを同義に用いている。横山のいう「思想」は、教育を通じて培われる教養、自己啓発する意欲の意である。つまり、道德は、良心や道德心というより、むしろ向上心や気概に近い意味である。

確かに、ルポルタージュで目につくのは、貧民窟の住人が貧困の境遇に甘んずる姿である。『朝野新聞』掲載の雑報記事「府下貧民の真況」を例示する。

総じてこの人々は貧賤を苦と思わず一度この中に陥ればかえって安楽なりといい、再び人間に出ることを願わざる者の如し¹⁵⁾。

この人々が常に物語るところを聞くに、もとより世にのぞむこともなく、ただ一日三餐腹を充たすだけの食物のこのみにて…¹⁶⁾。

前者は浅草松葉町、後者は芝田町の記録である。貧民たちは口過ぎに汲々とするばかりである。貧苦と向き合い窮状を脱せんとする気概はなく、自彊とは無縁の気儘な暮らしもよしとする惰気すら漂う。

気概が無いから、教育にも無関心である。前掲「昨今の貧民窟」は、7、8歳の女兒は燐寸の箱張り、あるいは三味線を教えて流しにし、男児は年季奉公に出るは稀で、多くは大道芸やかつぼれを教える、「要するに貧民窟の児童は彼らのための金庫」だと嘆ずる¹⁷⁾。満足に教育を受けずに成長した子どもは、親と同じ貧困の人生を送ることになるだろう。

横山「日本の社会運動」は、貧困児童の行く末を予見する。

父母より得たる自然のままの、しかも汚濁なる空気・食物、発達の不健全なる体力を用いて力役に従事しかろうじて一生を送るのみ。その間なんら教育を加えらるることなく思想を養うことなきなり¹⁸⁾。

横山によれば、教育の意義は、智識の修得のみならず、向上心や気概の涵養にもある。

以上、1900年前後の日本社会における貧困を、経済・智識・道德という相関する三つの観点から確認した。貧困とは、金銭、知識や教養（その基となる教育）、向上心や気概の欠乏の総体と捉えることができる。

2. 『少年世界』における「貧困」の把握

2.1. 『少年世界』の立ち位置

『少年世界』は、貧困は立身出世の糧だと切論する。それを受けて読者少年たちは、艱難辛苦を耐え凌いで偉業成就せんと応える。『少年世界』における貧困は、超克すべき境遇だと理解されていた。

しかし現実には、貧困は死活に関わる問題である。貧窮少年たちにとっても、飢え死に至らずとも、自力で解決できる問題ではなかった。だからこそ、進学を断念せざるを得なかったのである。ではなぜ、雑誌も読者も挙げて、貧困は超克しようと主張したのだろうか。そのモチベーションの原動力はどこにあったのだろうか。『少年世界』が1900年前後の日本社会における貧困の現実をどのように捉えていたか、つまり、『少年世界』における貧困観という観点から考えてみたい。

始めに、社会の貧困を論じる場における『少年世界』の立ち位置を、主に読者の寄書から検討する。

『少年世界』巻1から巻4までに掲載された寄書のなかに、現実社会の貧困を主題に掲げた寄書が2本ある。〔寄書1〕三重県伊賀国（マ）新居村 中村喜十郎「貧民学校の設立を望む」、〔寄書2〕茨城県東茨城郡堅倉村 小林勇之助「貧民問題を如何にすべきか」である。

〔寄書1〕「貧民学校の設立を望む」は、当世の学歴社会の本格的始動から書き起こし、貧民少年への憐愍、富家子弟の放逸への憤慨へと進むが、そこで唐突に途切れてしまう。本題の貧民学校設立には言及していない、未完の寄書である。以下は、貧民少年を描いた一節である。

貧民の少年子弟は尋常小学をさへ卒ふる能はずして、或者は賤工となり、或者は紙屑買奴となり身に敝衣を纏い凜乎たる嚴寒炎赫たる盛暑と家でも終日汲々として業務に従事しつつあるは實に愕然の至りならずや。
2巻12号_1896/6_6-p.1210

一読して生じるのは既視感、貧民少年の描写が下層社会のルポルタージュに似ているという感覚である¹⁹⁾。投稿者自身が貧民少年の現実を目の当たりにし、その経験に触発されて書いたのかという疑問である。富家子弟の描写した一節「富家の少年子弟は身に錦衣を着し山海の珍味を口に、意気揚々校堂に出入りし書籍雑誌に厭き、放蕩逸楽に貴重光陰を徒消して…」²⁰⁾ (2巻12号_1896/6_6-p.1210) は、『少年世界』紙上でしばしば目にする表現そのままである。

投稿者中村喜十郎の住所、三重県伊賀国新居村は、元の伊賀国伊賀郡新居郷。1889（明治22）年の町村制施行時に上野市（現在は、合併して伊賀市）に併合、奈良県境に近い山に囲まれた僻村である。そんな新居村に、賤工や紙屑買で暮らす少年、あるいは錦衣を着し山海の珍味を口にできる放蕩少年がどれほどいただろうか²¹⁾。

〔寄書2〕「貧民問題を如何にすべきか」は、近代文明論から論を立て、貧民問題の解決を訴える。

（人権、宗教、思想の自由は認識されたが）独り社会上の不平等と経済上の不平均とは人々に加ふるに専制の鐵鎖を以てし、社会の下層なる人民をしてもっとも不平等不自由なる桎梏の下に困頓せしむるを見る、これ豈奇異なる現象にあらざらんや。（中略）貧民問題は近世文明の一大病弊なり而して此問題たる決して経済的問題のみに止まらず、慈喜（善か）的問題として之を解釋するに待つ。（中略）吾人は血あり涙ある志士仁人が其慈善の熱誠を灑ぎ來りて以て此一大問題を解釋し來らんことを望むや切なり。

3巻19号_1897/9_11-p.2120

長文を厭わず引用したのは、〔寄書1〕と同じ疑問が生ずるからである。すなわち、自由民権論、社会批判論を写し取ったかのような文体、現場に身を置き観察した者ならではの観点の欠如である。そもそも投稿者は、貧民問題の解決を主張するが、彼自身が解決に向けて動くとはしない。「志士仁人が其慈善の熱誠を灑ぎ來り解釋する」と、誰か志士仁人が現れて貧困問題をきれいさっぱりと解決してくれることを切望するのみである。〔寄書2〕は、書物を通して貧民の存在や社会民権論を知った少年による意見表明の域を出ない。

〔寄書1〕〔寄書2〕における貧困問題の把握は、どこか現実感、切迫感に欠け、読書経験に基づく表面的な理解という印象を払拭できない。投稿者は、現実社会における貧困を彼らの世界との連続の中で捉ようとはしている。だからこそ、貧民学校の設立や貧困問題の解決というテーマを訴えたのである。しかし、『少年世界』読者の世界と貧民の世界との間には一線が引かれており、読者少年は貧民の世界に足を踏み入れてはいない。彼らにとって貧民の世界は向こうの世界であった、と思われる。

この読者少年の立ち位置は、貧民を目撃した読者の寄書からも認めることができる。〔寄書3〕越前国 松野七十二「父母の恩」は、厳寒の早朝豆腐滓を買いに行く少年の姿に見る度に感憫胸に迫ると綴り、次いで我が身を省みる。

世にはかかる可憐児のある中に、己れ等は、寒き時は暖かに衣ることを得、又學校に入りて、十分に學業を修ることを得る、此最大幸福は、果たして誰の恩賜ぞ、知らずや、己れ等が父母は、日夜刻苦、業務を精勵して、家産を豊かにせし所以のもの。

1巻6号_1895/3_1-p.582

可憐児とは、貧困のため学校に行くことができず働きのでる子どもの意である²²⁾。投稿者は、そのいたましい姿に憐憫の情を感じる。しかし、「可憐児のある中に、己れ等は」と、可憐児と我らは一続きの社会にいることを認めた上で、彼らと我らとはと生活が異なると続ける。彼我の差異を認めたところから、投稿者の思考は我ら読者少年の生き方に向かう。我らの

幸福の所以である父母の恩に報いるべく、学業に励み、孝行を尽くさねばならないと、論理は展開するのである。

〔寄書3〕に限らず、貧民を目撃した読者の寄書からは、一つの共通する論理展開を読み取ることができる。現実社会には貧富の差異が存在することを認めた上で、読者の世界に身を置いて、彼方にある貧民の世界を見つめる。続いて、彼方に引き比べてわれわれ読者の幸福を再確認し、われわれ読者の生き方を省察する。そうして決まって、幸福を保障してくれる父母や国の恩に報いるよう孝行と忠義を尽くし、そのために刻苦勉励しなければならないと誓い、その誓いを読者に呼びかけるという展開である。

『少年世界』の編集方針もまた、貧民の世界には立ち入らない。前掲した〔寄書2〕「貧民問題を如何にすべきか」の論評は、その典型である。

筆鋒鋭利、文意亦なりと雖。貧民問題を論せんより、先づ少年の前途に横たはる幾多の問題あるを點檢するの優れるに若かず。 3巻19号_1897/9_11-p.2120

論評は、寄書の論考自体は評価しつつも、少年の前途に関わる問題を調べる方が先だと意見する。社会的問題に関心を向けるよりも、自らの前途を定め、目標達成に備えるべきだというのである。

論評では、貧民問題よりも少年の前途に関わる問題が優先される。貧窮少年にとって現実の貧困は、まさに前途に関わる問題にも拘わらずである。このような論評や寄書が許容されるのは、『少年世界』の読者も、もちろん貧窮少年も、編集者も、貧民の存在は向こうの世界の問題と捉えてからだではあるまいか。『少年世界』の立ち位置は、貧民の世界とは異なる世界に在る。

2.2. 『少年世界』における貧困観念

『少年世界』は、貧窮を訴える読者少年を、貧困を堪え凌いだ果てには立身出世が待っていると励ます。しかし、『少年世界』における貧困は、現実の客観的物質的貧民の状態ではなからう。それは、少年の力で超克しうる貧困である。『少年世界』における貧困観念を考える上で着目したいのは、貧困の主観的価値、つまり、金銭、知識や教養、教育、向上心や気概の欠乏の総体としての貧困である。

『少年世界』における貧困観念を賤業意識という観点から検討しよう。前述したように、賤業とは、日稼人足、車夫、屑拾い、門付などキツイ、キタナイ、キケン、そして卑俗を特色とする（物乞いに関しては後述）。『少年世界』では、この賤業認識に新たな意味が追加される。典型例は、貧困のため学業継続や進学を断念した少年たちの寄書に現れる。結局のところ、少年たちは自らの境遇を諒解するのだが、賤業、あるいは、それに類する言葉が、諒解に至るまでの葛藤のなかに登場する。

〔寄書4〕我が憂苦の経歴を叙して諸君に望む 2巻8号_1896/4_6-p.809

投稿者：栃木縣河内郡宇都宮材木町 松本惣吉

趣 旨：「中學へ入校して益々勉強して學術を究め」ようと熱望したが、家業多忙の故に許されず、進学を断念して「我が家の賤業に従事」した

〔寄書5〕本誌第十八號落花一片を讀みて感あり且本誌の余等に良師良友たるを喜ぶ

2巻14号_1896/7_7-p.1432

投稿者：兵庫縣有馬郡鹽瀨村 三田谷巳之助

趣 旨：尋常小学校を卒業し、「貧賤なる農家に生まれしとはいへせめて小學全科だけは假令農業に従事するにもせよ年経て後悔ゆる時は来るべし」と、高等小学校進学を願ひ出たが許されず、山村僻地で鋤鋤を手に田畑を耕している

投稿者は、自らの職業や出自を「我が家の賤業」「貧賤なる農家」と表現する。敢えて自己を卑下した言葉を使ったともいえようが、より強く響くのは、高等学校で修得したかった学問的知識を必要としない仕事に従事しているという意識である。その証左が〔寄書5〕で、「假令農業に従事するにもせよ」と、農業を精神労働に比べて賤しい肉体労働と論断する箇所である。進学を熱望する少年にとって、僻地での野良仕事は賤業に映るのだろう。ここでの賤業は、学問によって培われる専門的知識や技能を要しない職業一般を意味する。

したがって、賤業には、人の命に唯々諾々と従う職業、ひたすら人に使われる職業という属性が加味される。それを代表するのが、給仕である。当時の給仕は、雑用係を意味し、小学校を終えるか終えないかの子どもが就くことが多かった。試みに、『日本国語大辞典』を引くと、「諸省内に若年の者給仕と唱え使役せらるるもの多し。愍惜に堪えざるなり」（「新聞雑誌 58号」1872年）の引用文がある²³⁾。

小説「落花一片」（漣山人/巖谷小波閔、湖山人/黒田湖山作）は、『少年世界』1巻18号19号に掲載された小説で、中学進学を断念し給仕になった少年を主人公に据えている。父親から給仕の職を勧められた主人公は、眠れぬ一夜を明かす。

幾度か、われは、給仕のあはれなる様を目にせり。朝早くよりほの暗き夕べまで、やれ水よ、それ茶よ、左様ばたばたしてはいかぬ静かにせぬか、何爲小使部屋まで行くのに斯う長くなる、こき使はれた、き使はれて、果ては、ヘッポコ雇、小使にまで小言をいはれ、たまたま言明けせんすれば、給仕ぐらゐが抗辯するという事があるものか、と一言にはね飛ばされ、(中略) 給仕！如何にしても給仕となるは残念なり

1巻19号_1895/10_4-p.1893

主人公によれば、給仕は四六時中酷使され、小使いにまで罵倒される、まさに蔑むべき職業である。その給仕にならざるを得ない無念さに、彼は一夜を泣き明かす。給仕は、日々の糧は保証される。だからこそ、父の親は伝を頼って給仕を斡旋してもらったのである。それにも拘わらず、泣くほど嫌がるのは何故か。中学で学び果ては上に立つことを夢見る主人公から見れば、雑用のみに使役される給仕は何ら価値のない下等な仕事と思われたに違いなからう。

小説「落花一片」は、おおいに反響を呼んだ。前掲〔寄書4〕〔寄書5〕は、この小説に触発された投稿である。投稿者は、主人公に自らを投影し、主人公の悲嘆に共感する。投稿者が自らの職業を賤業と捉える意識と、主人公が給仕を蔑む意識とに通底する賤業観念を認めることができる。

『少年世界』における賤業は、専門的知識や技能を持たない者が就く、人の命に従い使われるだけの職業を意味する。このような職業はすべて、仕事内容の如何に関わらず賤業とみなされるのである。この賤業観念、また、賤業に対する蔑視や厭悪の根柢にあるのは、上に立って国家の発展に貢献すべき存在という読者少年の自意識である。この自意識は、読者少年が共有するわれわれ意識に他ならない。したがって、賤業に就くことは、自己否定に繋がる。そうならぬよう、彼らは、進学、あるいは苦学独学して奮励努力し、一方の雑誌もまた言葉を尽くして激励する。つまり、教育の欠如の対極を志向するのである。

修学に勉め、国家の発展に貢献するためには、向上心や気概は必須である。『少年世界』における向上心や気概の内容を、「物乞い」の描かれ方から考察しよう。

論ずるまでもなく、読者少年にとって「物乞い」は、読者の世界から向こうの貧者の界に墮ちることを意味する。『少年世界』掲載の小説や立志伝には貧窮に苦しむ少年が登場する。彼らは、衣食住窮乏、片親（多くは母親）、学業中断の三要素を特徴とするが、如何なる窮状にあっても「物乞い」「乞食」だけは断固拒絶し、学びの意欲を失わない。

立志小説「少年立志 小坑夫」（岩本善治作）²⁴⁾は、主人公正吉が、艱難辛苦を乗り越えて、足尾銅山の技師に上進、出世の鑑になるまでを描く立身出世物語である。物語は、母親を亡くした正吉が、たった一人の身内、足尾銅山で坑夫長を務める叔父に身を寄せるところから始まる。正吉は、まさに文字通りの貧窮少年である。強欲な悪人の叔父は、世話賃を出し惜しみ、正吉に「貴様は乞食が出来るか」と聞く。驚いた正吉が答えて曰く、

乞食ですと。乞食は出来ません。ひもじい事ならいくらでも辛抱はしますが。(中略)お母さんが、いつでもこう云ひ云ひしました。乞食をするものぢやない。精出して働いて、それで食べられなけれりや、ひもじくても辛抱するものぢや、飢え死ぬるという場合でもなけれりや、乞食などしてはならんといひました。随分貧乏でしたから二人で、仲々ひもじい事の辛抱をしました。

4巻6号_1898/3_13-p.53～p.54

母の死後、正吉は、貯えてあった纒かの甘蔗で食い繋ぎ、食い尽くした後は一口も食事をと

らずに、叔父の元に辿り着く。一人になった正吉は、母と子二人でひもじさを辛抱したように、母の遺訓を固守するのである。ひもじい事を辛抱せよ、餓死寸前の限界まで「乞食」をしてはならないという、母が常に言い聞かせた教えは、実践を通して身にしみこんでいる。正吉における「乞食」の否定は、遺訓の固守であり、時をかけて培ってきた母親譲りの意気地である。

「物乞い」「乞食」になって、人からものを恵んで貰う身分に堕ちたくなければ、働いて自分の手で稼ぐより術はない。正吉は、叔父に世話を掛けまいよう懸命に働く。またその後、叔父の悪計から逃れて水車番方に身を寄せることになるが、そこでも人並み以上に働いて、水車夫一家の信認を得る。

『少年世界』の立身出世物語には、いつも決まって、主人公の貧窮少年をサポートする篤志家が登場する。そして主人公は、これまたいつも決まって、全面的な援助を拒み、自活の道を探ろうとする。例えば、亡夫の跡を継いで客船船長を目指す少年が主人公の「ボーイ長吉」(漣山人/巖谷小波閣、森愛軒作)では、父を命の恩人と慕う英国人ジョージ大佐が養育を申し出ると、「全然大佐の厄介になるのはいさぎよくない。何か適当な職業を得て英国に留まりたい」²⁵⁾という。主人公の貧窮少年たちは、一様に、働いて自分の道を切り拓く意志、自主独立の精神に溢れている。自主独立の精神を有する者ならば「物乞い」を断じて認めないこと、論を俟つまでもなからう。

『少年世界』読者は、現実社会の貧困を、読者が暮らす社会と一続きの場所で起きている現実だと認識はしている。しかし、彼らは、貧困社会とは一線を画した場所に立って貧困を捉えようとする。一線とは、貧困状態の主観的価値である。貧困状態は、現実の物質的欠乏よりも、知識や教養、教育、向上心や気概の欠乏の総体という主観的価値において把握される。知識や教育、教育、向上心や気概が欠乏する貧民の世界は、読者の向こう側にあると観念される。一方、修学して知識教養の修得に励み、向上心や気概が充溢していれば、たとえ物質的窮乏にあっても読者の側に位置することができる。われわれ意識を共有する読者少年によって構成される知的欲求と気力にあふれた空間が、彼らのわれわれ世界である。

読者少年のわれわれ世界における貧困は、修学意欲や向上心の欠乏を意味するから、物質的欠乏状態はさほど顧慮されない。なるほど、このような主観的価値に基づく貧困観念からみれば、貧困は精神力によって超克しようと主張されるに違いない。

3. 貧窮少年における自身の「把握」の貧困

現実には、読者少年がわれわれ世界に留まることは、富裕少年にとっても貧窮少年にとっても容易いことではない。富裕少年は満ち足りた環境の故に、貧窮少年は貧窮の故にモチベーションを維持するのは難しい。とはいえ、学業の継続や進学における差異は明らかである。学業継続の夢絶たれた貧窮少年は、苦学独学の道を進むか、さもなくば勉学への意欲を家業精勤や親孝行に振り向けねばならない。精神的にも経済的にも、貧窮少年の方が遙かに逆境にある。

このような現状を熟知しているからこそ、『少年世界』は、寄書評「逆境に處して奮を發するは易く、逆境に處して志を摧かざるは難し」のように、数多存在する貧窮少年に向けて励ましを送り続けたのである²⁶⁾。

学業を断念した貧窮少年は、校門を潜る嘗ての級友を目にした時、同じわれわれ世界に居りながら、この世界には厳然とした差異が存在することを痛感するだろう。このような貧窮少年たちは、自らの心情を吐露した寄書を送り、『少年世界』紙上を通して共同体を形成していった。われわれ世界の内部に成立した、もう一つのわれわれ世界である。

前掲した小説「落花一片」は、中学進学を夢絶たれた主人公、桜木芳三の短い生涯を綴った小説で、貧窮少年のわれわれ世界形成の契機になった。「落花一片」とその反響を通して、もう一つのわれわれ世界の形成を跡付けてみたい。

この小説には、主人公とは別に一人の少年が登場する。日頃の気鬱晴らしにと近江漫遊に出た富裕少年、雪野淡月である。物語は、淡月が赤神山登山の道すがら、中腹にある阿賀神社境内の石段に踞る芳三に出会うところから始まり、芳三の死を知るところで終わる。芳三の境遇は、淡月への述懐という形式で語られる。

冒頭、淡月と芳三の出会いの場面では、文章と挿絵とによって貧富の差異が鮮明に描かれる。詩集を懐にして遊山に出る淡月、杖を頼りに病を押して日参する芳三、名前からして対照的な二人の境遇が流麗な文体で綴られる。さらに挿絵が、相乗効果をもたらす。見開き紙面の右上には、帽子、足袋、羽織と小綺麗な身なりの淡月の、詩集を膝に置いたまま赤山中腹から境内石段を見おろす姿が描かれる。紙面左下に描かれる芳三は、襤褸を纏い裸足に藁草履という見窄らしい身なりで、細い竹杖に縋って踞っている。貧富の差異を強烈に印象づける構図と描写である。貧窮少年は、差異の存在を突き付けられ、逆境のなかで苦闘する桜木芳三に我が身を重ねながら読み進めていったと思われる。

芳三の述懐は、概略以下の通りである。

15歳になる芳三は、警官の父、母と妹の四大家族、父の薄給でかつかつの生活である。クラスでも一際優秀、小学全科卒業時に中学進学を強く勧められるが、「汝一人を中學に遣らば、我家は殆んど飢渴に逼るべし」²⁷⁾という理由で許されず、已むなく父の命に従って郡役所の給仕に就く。知人を避けて身を隠すように田圃道を辿って赴いた郡役所では、「給仕、給仕と呼べるゝごとに、壽命の縮む心地し」²⁸⁾、来ないで欲しいと願う知人の影に「忙しき中に己が身を潜さんとあせる」²⁹⁾日々を送る。待ちわびた休日に帰省すると、「途上、親しき友に遭て、避くる間もなく、君は何してと尋ねられて、挨拶に口澁りしより以来」³⁰⁾、足は遠のく。帰らぬ息子を案じ下宿を訪れた父親に、土産と白銅貨3枚を手渡され、その3枚で東洋立志編を購入、むさぼり読む。そして、立志編に描かれた古今英雄の堅忍不拔、精励勤勉の精神に感銘し、失意の暗闇から立ち上がる。自らを鼓舞し、「今、世にある人、悉く中學大學を終へたるものに限れるか、あらずあらず、大にあらず、必しも然く限ら

ざるなり。…名を為すの要は、外、物にあらずして、内、心にあり。刻苦して勉めば、何ならざる事のあるべきぞ。…如何で自ら屈する事をせむ。勉め勵め！飽くまではげめ！」³¹⁾、と誓う。決意も新たに独修に励む傍ら、予てからの夢、東京遊学を実現しようと僅かな給料を切り詰め無理を重ねて暮らすうちに、結核に罹患してしまう。最早手遅れの病状を知り、道半ばで逝かねばならぬ口惜しさ悲しさを慰めようと阿賀神社に日参するも甲斐無く、自叙伝「薄運録」を書き残して世を去る。

地方在住の貧窮少年は、桜田芳三少年に大いなる共感を覚えたようである。小説「落花一片」に関わる寄書は6本を数える。『少年世界』では、小説に関する寄書掲載が少なく、「落花一片」に類する小説に関しては寄書は見当たらない³²⁾。編集部による「遊学のために上京する事態に歯止めをかけたいという、当時の為政者や指導者の危機意識」³³⁾への配慮を考え合わせたとしても、やはり寄書6本は異例であろう。寄書要旨を、掲載順に列挙する。

1. 〔寄書6〕過去の吾 1巻21号_1895/11_4-p.2148³⁴⁾
 投稿者：埼玉縣北足立郡五丁臺 隱逸學人 高山恵治 28歳
 趣 旨：東京遊学の希望は、代々の農家廃絶、貧家計との理由から許されず、上京した学友の噂を耳にする度に天の無情を嘆く歲月だったが、年老いた父母の姿を見て、遊学を断念し農業で継ぐ決心をした。

2. 〔寄書7〕私の経歴を叙して高山恵治君に交を乞う文 2巻1号_1896/1_5-p.92
 投稿者：伊勢國一志郡大井村 岡野孫三郎
 趣 旨：貧困のため中学進学を許されず、また独学も捗らず、中学に通う級友を見て「悲鳴益至り、相共に語る友なきをかこつ」日々だった。落花一片を読んで「始めて同情の友を得たり、爾來憂を慰むるの友、此小説のみ」、さらに〔寄書6〕高山君の文を読み同士を得た思いで、交友を結ばんと乞う。

3. 〔寄書4〕再録 我が憂苦の経歴を叙して諸君に望む 2巻8号_1896/4_6-p.809
 投稿者：栃木縣河内郡宇都宮材木町 松本惣吉
 趣 旨：家業多忙ため中学進学を許されず我が家の賤業に従事したが、洋服姿で中学に通う校友を見て悲嘆に暮れるなか、唯一の友は『少年世界』だった。だが、「落花一片」、〔寄書6〕高山君と〔寄書7〕岡野君の文を読み、意中を同じくする友を得て欣喜、宿年の憂苦も解け、家業に従事する覚悟ができた。我が憂苦を憫察してくれる全国少年諸君に、交友を結ばんと乞う。

- 4.〔寄書5〕再録 本誌第十八號落花一片を讀みて感あり且本誌の余等に良師良友たるを
喜ぶ 2巻14号_1896/7_7-p.1432

投稿者：兵庫縣有馬郡鹽瀨村 三田谷巳之助

趣 旨：高等小学校進学を許されず農業に従事、通学する級友を見て嘆息の毎日である。
山村僻地には良友も、共に語る人もおらず、「落花一片」の桜田芳三少年に我が
境遇を重ねて慰め、『少年世界』を唯一の良師良友としている。我が憂苦を憫察
してくれる全国少年諸君に、交友を結ばんと乞う。

- 5.〔寄書8〕松本惣吉君と感を同じふす 2巻16号_1896/8_7-p.1631

投稿者：京都府天田郡中筋村 松雪 大槻和三郎

趣 旨：陸軍幼年学校進学を許されず農業に従事、通学する級友への羨望押さえ難く、『少
年世界』を唯一の楽しみにしていたところ、〔寄書4〕松本惣吉君の経歴と覚悟を
読み、同心異体の思いがし、遊学の夢を絶ち農業に従事することを決心した。松
本君を始め全国少年諸君に、我が憂苦を憫察し交友を結ばんと乞う。

- 6.〔寄書9〕來れ大和少年諸氏 2巻18号_1896/9_7-p.1829

投稿者：宇陀郡五屋原 五谷松太郎

趣 旨：貧困のため中学進学を諦め、昼は農、夜は読書に精を出す毎日は、「落花一片」
の桜田芳三少年と同じ境遇だ。小説に刺激され、益々勉勵する覚悟である。同郷
の士に、共に励み投稿せんことを乞う。

寄書では、投稿者それぞれの今に至るまでの経緯が語られる。すなわち、進学を許されず已
むなく仕事に就き、人目を気にする苦悶の日を送るが、最後には豁然として、仕事、孝行、独
修に勉勵する意志を固めるという経緯である。皆一様に、「落花一片」桜田芳三少年の姿を引
き写したかのように見える。

興味深いのは、「落花一片」、及び〔寄書6〕に端を発した寄書が、先の寄書を受ける形で繋
がっていくことである。「落花一片」は、読者少年にとっては初めての、貧窮少年の苦境を描
いた小説ではなかろうか。小説を読んだ貧窮少年には、芳三少年の苦境を描く表現が、あたか
も自らの描写のように映ったことだろう。彼らは、「落花一片」が雑誌『少年世界』掲載され
たことによって、同じ境遇の仲間が存在することを知り、さらに、小説掲載という出来事と寄
書とが、苦境を公表することへの躊躇をなくし、投書を促していったと思われる。このような
反応が、先の寄書が次の寄書を呼ぶ、いわば寄書の連鎖をもたらしたといえる。

さて、寄書には概ね共通する特徴がある。第一に、進学する級友を見る都度、働かざるを得
ない自身の現実を痛感し、その境遇に悲嘆する。第二に、苦境を語り慰め合う友人がいない。
第三に、芳三少年や投稿者に自分を重ねる。そして第四に、苦境にあるのは自分一人でなく、

同じ境遇の少年たちがいると認識。その認識を足場にして、進学への執着を断ち、今居る場所での精励を決意する。投稿者はそれぞれ、これら四点に関する経歴を公表し、これら四点に共鳴する読者少年との交友を願い出ている。

したがって、投稿者と願いに応じて交友を結んだ少年たちの間には、共通項が存在することになる。進学できない口惜しさ悲しさを実体験していること、今いる場所での精励を決意していること、この二点である。こうして境遇と志向を同じくする仲間と彼らの交流の場が形成される。貧窮少年のわれわれ世界である。これを、‘われわれ世界’と表記する。

貧窮少年たちは、‘われわれ世界’形成過程を通して、また‘われわれ世界’に留まることによって、自身の貧困を諒解していく。貧しさに苦しんでいるのは自分一人ではなかったという悟りを支えにして貧苦を受け容れ、仲間の存在を励みに貧苦を堪え凌ごうと心を定めるのである。

‘われわれ世界’の成立構造は、貧窮少年をして自彊に駆り立たしめることになる。というのも、この世界に身を置く少年は、自分と同じように辛苦に堪えているに違いない仲間の存在、仲間の眼差しを意識せざるをえないからである。仲間の眼差しを意識した時、自彊は仲間への見栄に転ずる。見栄を張らねば、この世界の一員として認められ、この世界に留まることはできない。自彊と見栄とは表裏一体、相乗して少年を駆り立てるのである。

看過できないのは、貧窮少年の‘われわれ世界’が『少年世界』の雑誌上で形成され、雑誌読者の間のみ存在していることである。要するに、実際に語り合う友がいない少年たちが作り出した空間である。そもそも、‘われわれ世界’は、『少年世界』読者のわれわれ世界という全体集合の内部に位置する、言わば部分集合である。読者のわれわれ世界における貧困は、修学意欲や気力の欠乏であり、刻苦勉勵によって克服できると観念される。したがって、それに重なる‘われわれ世界’においても、貧窮少年は現実に貧苦状態に在るにも関わらず、一層の刻苦勉勵を重ねることで貧困は克服しようと捉えている。その意味で、‘われわれ世界’の住人である貧窮少年にとって、貧困は観念的である。

そしてさらに、‘われわれ世界’の形成によって、貧窮少年と、彼が暮らす地域における現実の貧困との間に境界が生じることになる。貧窮少年は、‘われわれ世界’に留まる限り、実際には窮状に身を置きながら、現実から隔絶された観念の世界の住人である。貧窮少年と現実の貧困の間には、少年自らが設けた境界が存在するのである。

田嶋一は、明治中後期、地方の若者たちの間に「通信教育や苦学によって学歴社会の周縁に道を開こうとする動き」が現れると論じている³⁵⁾。貧窮少年たちは、地方にあって産業界や地域のリーダーとして活躍したかもしれない。しかし、彼らは、‘われわれ世界’に留まることで、現実と断絶した場所に立っていた。地域のリーダーになった時、彼らは地域の貧困にどのように向き合い、どのように行動したのだろうか。

結論

‘われわれ世界’の特徴を富裕への対抗と自己責任に絞って論じ、結論に代えたい。

貧窮少年にとって、貧富の差異は学校へ通う嘗ての学友となって顕在化する。教科書を抱えた学帽に制服姿は、適わなかった進学と富裕の象徴であろう。‘われわれ世界’は、眼前に現れた富貴への羨望、身上への悲嘆を、高等学校教育や学歴社会への対抗心に変える。〔寄書10〕宮城県加美郡中新田町字岡町 伊藤政次郎「学窓以外の少年に告ぐ」は、独学者に向けた檄文で、高等教育や学歴社会への対抗心を剥き出しにする。

活世界に處して活事業を軫旋するは、獨り學窓裡課業に汲々たりしもののみあらずして、學校に入るの便を欠き自ら師となり自ら友となりて修めたるもの、優に學校出身者を墮して上位を占むる在る。学外に在りて獨り自ら修むる者は…自から考て、自から究め、自から問うて、自から答ふるの他、一の頼るべきものなく…夫れ事取るに難きもの、一たび之を修むれば勢ひ之を軽んずること能はざるなり。

3巻7号_1897/4_9-p.802

〔寄書10〕は、独修の優位性を、実社会で活躍する実業家を例に挙げて主張する。受動的な学校教育よりも能動的な独修の方が、自主独立の精神を涵養するというのである。もちろん、実社会で経験を積んだ叩き上げが活躍する場は存在しただろう。また、自主独立精神の涵養も、独修の利点に挙げる。受動的な学校教育よりも独修の方が、自問自答する他に頼るものがないから自主性が養われると論じる。確かに、独り学んで身につけた知識技能は生涯役立つという主張は、我々の経験からも納得できる。

しかしながら、1900年前後、学歴は着実に社会のシステムに組み込まれつつあった。何よりも、働きながらの独修は、精神的にも物理的にも至難の業である。〔寄書10〕からは富貴への強烈な抵抗を読み取ることはできるが、独修の優位性は根拠を欠くといわざるをえない。

問題は、独学断念がひとえに自己責任に帰する点である。〔寄書10〕では、「修学を断念するが如きは、此固より薄志弱行者の自暴自棄に出すと云ふべし」（同上）と断言する。‘われわれ世界’の論理によれば、貧困は刻苦勉励によって克服可能であり、克服できないのは刻苦勉励を怠ったからということになる。本来は社会的問題である貧困は、個人の精神的問題に収斂され、自己責任に転嫁されるのである。

‘われわれ世界’においては、自からの意志でその世界の一員となった故に、そして自強と見栄とによってのみその世界に留まり得る故に、その世界からの脱落の責任は少年一身に帰することになる。貧窮少年は貧困を超克できなかった要因を、自己責任として抱え込まねばならないことになる。‘われわれ世界’の構造は、自己責任の基盤を為すのである。

ここであらためて、「落花一片」芳三少年の決意を挙げたい。

名を為すの要は、外、物にあらずして、内、心にあり。刻苦して勉めば、何ならざる事のあるべきぞ。…如何で自ら屈する事をせむ。勉め勵め！飽くまでげめ！

1巻19号_1985/10_4-p.1895

芳三少年の決意は、窮状に抗う貧窮読者少年の決意であったといえよう。

安丸良夫は、幕末維新期における民衆道德の特徴の一つとして自己責任を挙げる³⁶⁾。しかし、木下光生は、近世の貧困を大和国田原村のデータから分析し、「人々の行動を律していく背景には、人の手を借りず、自己責任にて自活することに高い価値を見出すような発想、あるいは『勤労/勤勉]こそを是とする」価値観が存在したと論じる³⁷⁾。貧困の超克を頑なまでに自己責任にする貧窮少年に、近世からの伝統を認めることができよう。自己責任は、近世から近代の少年へと連綿と継承されていると考えられる。

【注】

- 1) 「『少年』と『世界』…監修者会議から」における小田切進氏の発言（『名著サブプリメント 春期増刊号 特集=少年世界』名著普及会、1990）、p.2）
- 2) 少年とは、少年と青年が未分化の時期における少年、つまり未だ大人の域に達していない年頃の男女を意味する。特に、本稿が対象とする1900年前後の少年は、10大後半～20歳前後までの男女を指す。
- 3) 拙稿「雑誌『少年時代』における‘われわれ意識’の形成に関する一考察」（『目白大学人文学研究』18号、2021）
- 4) 中川清編『明治東京下層生活誌』（岩波文庫、1994）の解説。同書、p.295。
- 5) 木村小舟『少年文学史 明治編 上下・別巻』（童話春秋社、1942）に詳しい。寄書は、第4巻から姿を消し、読者の要望を請け第4巻10号で「少年詞藻」「少年演壇」として復活したものの、僅か葉書二、三行の短さになった。
- 6) 横山源之助『日本の下層社会』1949年、岩波文庫、p.33～p.54。第二編「職人社会」、第三編「手工業の現状」、第四編「機械工場の労働者」、第五編「小作人生活事情」でも、いずれも数値を使って貧困の状態をルポルタージュする。なお、横山が『日本の下層社会』書き終えたのは、1899（明治32）年である。
- 7) 前掲『日本の下層社会』の他、（筆者不詳）「昨今の貧民窟 —芝新網町の探査—」（中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫、1994）所収など、1900年前後までの東京下層社会ルポルタージュの記録。
- 8) 横山源之助「日本の社会運動」（『日本の下層社会』附録）、前掲書、p.382。
- 9) 『日本の下層社会』に加え、中川清編『明治東京下層生活誌』所収ルポルタージュ14本、松原岩五郎『最暗黒の東京』岩波文庫、1988を使用した。
- 10) 布川弘「『貧民の数 —明治期における「貧民」認識の意味—」（『日本史研究』388号、1994、日本史研究会編）、p.166～p.168。
- 11) 桜田文吾『貧天地饑寒窟探検記』（中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫、1994）、p.41。中川の解説によれば、1890（明治23）年8月9日、1981（明治24）年1月の記事である。
- 12) 桜田文吾『貧天地饑寒窟探検記』（中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫、1994）、p.52～p.53。

- 13) 横山源之助「日本の社会運動」(『日本の下層社会』附録)、p.379～p.382。
- 14) 桜田前掲書、p.69～p.70。著者不詳「昨今の貧民窟 ―芝新網町の探査―」(中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫、1994)、p.165～p.170。中川の解説によれば、1897(明治30)年11月から12月にかけて掲載された記事。
- 15) 著者不詳「府下貧民の真況」(中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫、1994)、p.21。1886(明治16)年3月から4月にかけて、『朝野新聞』に掲載された。
- 16) 著者不詳「府下貧民の真況」(中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫、1994)、p.23。
- 17) 著者不詳「昨今の貧民窟 ―芝新網町の探査―」(中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫、1994)、p.169～p.170。
- 18) 横山源之助「日本の社会運動」(『日本の下層社会』附録)、前掲書、p.380。
- 19) 竹内洋は、明治10年刊行の青少年向け投稿雑誌『穎才新誌』の投稿の殆どは『学問のすゝめ』『西国立志論』のコピーといってもいいものと論じている(竹内洋『立志・苦学・出世 ―受験生の社会史』講談社学術文庫、2015、p.37)。『少年世界』の寄書にもコピーを疑わせる背伸びした意思表示や社会批評が散見される。書籍のコピーや寄書の剽窃は相当程度行われていたようだ。
- 20) 2巻12号_1896/6_6-p.1210
- 21) 寄書末尾に「吾人真に目撃して切憤懣に堪へざるなり」とある。投稿者が目撃したかのような文章だが、主語は吾人で、投稿者個人ではない。目撃した主体、目撃した事実の有無は曖昧である。
- 22) 1巻12号には、貧困のため学業継続を断念し野良に出る12歳の少年を描いた小説「可憐児」(江州 湖山人/黒田湖山)が掲載される。
- 23) 『日本国語大事典 第6巻』小学館、1973、p.94
- 24) 『少年世界』には、「少年の薰陶感化せむと欲せば、之に俊傑の傳を與へて、親しくその高潔雄偉なる言行を睹せしむより可はなし」(3巻1号_1897/1_9-p.17)という趣旨のもと、立志伝、立志小説というジャンルが設けられた。
- 25) 4巻6号_1898/9_9-p.624
- 26) 2巻8号_1896/4_6-p.809。「苦学を積まねば大業成事はできないのに、苦を履まずして名を望む者が数多い」という寄書の評である。
- 27) 1巻18号_1985/9_3-p.1794
- 28) 1巻19号_1985/10_4-p.1894
- 29) 1巻19号_1985/10_4-p.1894
- 30) 1巻19号_1985/10_4-p.1894
- 31) 1巻19号_1985/10_4-p.1895
- 32) 前掲「可憐児」(江州 湖山人/黒田湖山)、貧学生の儉約生活を描く「渋柿」(漣山人/巖谷小波閣、湖山人/黒田湖山作)2巻20号～22号などがある。
- 33) 田嶋一『〈少年〉と〈青年〉の近代日本』東京大学出版会、2016、p.360。
- 34) [寄書6]は、「落花一片」に関わる寄書で、読后感想ではない可能性がある。しかし、「落花一片」に関わる寄書という点、これに触発されて寄書が続く点から同類と捉えた。
- 35) 田嶋一『〈少年〉と〈青年〉の近代日本』東京大学出版会、2016、p.217。
- 36) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社、1999
- 37) 木下光生『貧困と自己責任の近世日本史』人文書院、2017、p.176。

*本稿は、日本学術振興会2022年度科学研究費補助金(基盤研究C:課題番号17K02262 近代への過渡期の都市住民家族における孝行の諸形態と主体形成)による研究成果の一部である。

(2022年10月12日受理)